

Vol. 306 家族とは～下重暁子著「家族という病」を読んで～  
(平成 27 年 6 月 25 日)

今日は 6 月 21 日父の日。夕方 5 時から始まった我が家でのパーティーは夫婦連れもあって 2 間の奥座敷はいっぱいとなり、今時の世相には見当たらない、打ち解けた、和やかなにぎわいとなり、先程 8 時にお開きとなりました。その爽快感を残したまま、期日の迫った F A X 通信の原稿に向かいました。

今回は大宅賞候補になった読売新聞の小林泰明記者が「新潮 45」に 16 ページに渡って書いた「かくも怪しき大陽光バブル～欠陥制度で破産寸前～」と一緒に検証し考えてみたいと思いましたが、もう少し良く勉強してと考え、折よく女性に人気が高い元 NHK アナウンサーの下重暁子さんの「家族の病」と出会い、駆足斜め読みして得たものは、第 3 章の終わりの部分に「石原裕次郎さんは病気になってから京都の川太郎と福井のべにや旅館にて療養を兼ね、隠れ宿としてこの一家とは信頼で結ばれている」と言う。裕次郎さんは血の繋がりもない川太郎の家族とべにやの家族と心がしっかり結ばれたていたから心の安定を保つことが出来たのだろう。北原三枝と言う最愛の女性を妻にしながらも、「やはり家族が欲しかったのです」と北原三枝さんは言うておられます。裕次郎さんが欲していたものは何なのか、自分を理解し、俳優石原裕次郎でなく、ありのままをさらけ出して生きる場所だったのです。その安心とは何なのだろう、何も言わないで分かる、自分の味方になってくれる人がいる場所、自分が自分でいられる場所、それは人間同士の理解と信頼の上しか成り立たない、それは人を本当に愛することが出来るから、相手からも信頼される人となれるのだと言えます。

私の家へ集まって来て下さる方達も、夫婦で来られる方達も、石原裕次郎さんと同じ思いであり、同じものを求めておられるのだと最近つくづく思います。誰かに自分の本音を話すことが出来ない人の心は脆くなって挫折するからであります。

経済にかかわるものは尚更であります。私の周囲でも自由で気ままな核家族を求める方が多くありますが、病人、事故によってあっけなく崩壊してしまう姿を多く見る時、尚更であります。

商工会議所は会員が家族の様に本音で頼れる場所でなければと思い、この会頭からのメッセージを書き続けて 300 回を超えました。

会員の皆様には会議所の諸行事、会合を活かして本音で話せる仲間（とも）・家族を作って下さい。本音で話せる友、信頼できる仲間達は、自分で作る事によって価値、信頼が生まれるものであります。

下重さんの書の第 4 章「旅立った家族への手紙」のそれぞれの末尾に、「仲の良かった兄弟、親子関係も崩れ、その原因はすべてあなたにあると私は思い込んでいました。」「酒と旅を愛したあなたともう一度ゆっくり話がしたかった。」「連れ合いと言う家族がいなくなったから・・・私はその時のために、一人でいることに馴れようと準備を始めています。最後は一人なのだ自分に言い聞かせています・・・」と書かれていました。

※下重暁子著「家族という病」から抜粋致しました。